心を描く

障害者アートの世界 8

和智海維人さん（上野原市）

緻密で豪快、物語は無限に

「宇宙戦艦ヤマト」「アズールレーン」「艦隊これくしょん」…。軍艦や宇宙船、ロボットなどが陸海空、宇宙を舞台に戦いを繰り広げるアニメやゲームが、絵画作品の源泉だ。上野原市和見の和智海維人（かいと）さん（19）は、さまざまな生き物や乗り物、キャラクターを合体させ、オリジナルのキャラクターを描き出す。

複数のタブレットを傍らに画用紙に向かうと、黒の油性ペンで形を描き、赤、青、紫、緑、黄などの色を丁寧に塗っていく。「赤い目は闇。味方と協力して敵を倒す」と海維人さん。次々とあふれ出す戦闘のイメージからストーリーを構築し、独自のキャラクターを登場させる。

イカやクジラ、カニ、サメなど海の生き物と軍艦を合体させたオリジナルの軍艦を〝開発〟してから敵と戦う。艦長は海維人さんだ。母の美恵さんは「小説的な感覚で絵を描いているのではないか」と話す。「大きな画用紙にいろんなものを描くのは、きっと物語がコマ送りで展開されているから」。家族がキャラクターになった「クッパ軍団」「将軍一家」もいて、海維人さん自身が物語に飛び込んで楽しんでいる。

幼い頃はスタジオジブリとディズニーの作品が好きだった。美恵さんは「多動で眠らないのが一番大変だった」と振り返る。DVDやパソコンの操作をすぐに覚え、自分でジブリ作品の好きな場面を見ている時だけが、海維人さんがじっとしている時間だった。3歳児健診で自閉症と診断された。

壮大な世界

絵を描く楽しみを知ったのは、通っていた静岡県の保育園での年長の時。筆圧が弱かった海維人さんに濃い鉛筆を与えると、喜んでアニメのキャラクターを描くように。小学生になると複数のキャラクターを組み合わせたオリジナルキャラクターを生み出した。小学5年生の時、山梨に転居。やまびこ支援学校（大月市）で寄宿舎生活を始めた中等部2年からは、美恵さんが用意した自由帳をすぐに使い果たすほど多くの絵を描いた。

当時、同校の美術教諭だった出戸努さん（現甲府支援学校教諭）は、海維人さんの作品の魅力を「緻密だけど豪快。思い切りがよく、タッチに迷いがない。小さなブロックがたくさん固まって壮大な世界が出来上がっている」と語る。寄宿舎で初めて作品を目にした時に描きためていた数百枚という作品の量にも驚いたという。「これは紹介せずにはいられない。世に出すべきだと思った」

自立の助け

高等部1年の時、出戸さんの勧めで、富士河口湖町で開かれた「山梨アール・ブリュット展」に出品。その後も県立美術館や大月市内の店舗に出展するなど、独創的な作品を発表している。

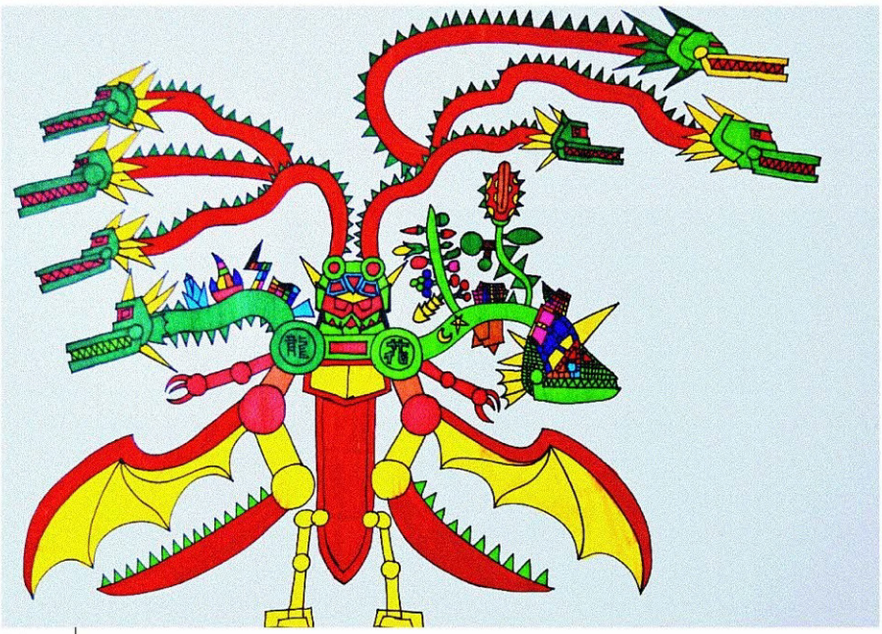
海維人さんは高等部の修学旅行で京都を訪問。寺院や仏像に触発され、かぶとや剣を装着した武士や城のイメージも作品に加わった。映画「インディ・ジョーンズ」「トゥームレイダー」「パイレーツ・オブ・カリビアン」などの名場面も吸収し、絵画で紡ぐ海維人さんの物語は無限に広がっていく。

昨年3月に支援学校を卒業。現在は甲府市内のグループホームで生活しながら、甲斐市の障害者作業所で農業に従事する。自然に囲まれた自宅でまき割りや一輪車を扱った経験を生かし、シャインマスカットや甲州小梅、原木シイタケなどの栽培に力を発揮している。

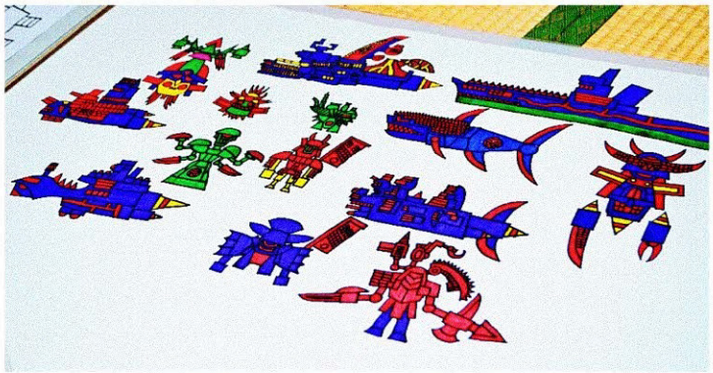
美恵さんは「海維人にとって絵を描くことは生きていること。創作が、障害がある子の励みになり、生きていく力になればいい」と、アートが自立への手助けになることを願っている。

〈山本久美子〉

＝次回は9月中旬に掲載します



「フラワードラゴン」油性ペン、51×72センチ



一枚に多くのキャラクターが登場する作品も

「乗組員はドクロ」。自作の海賊船を手に笑顔を見せる和智海維人さん　＝上野原市和見

掲載日：2020年08月19日／ぶんくら／紙面頁013
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社